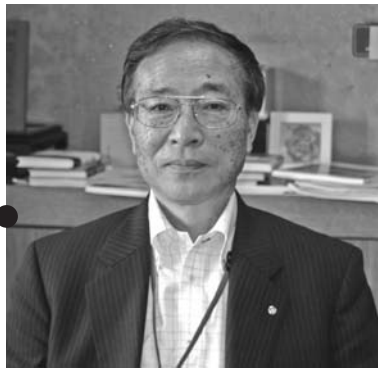
DEBUT 首長

長野県坂城町長　山村　弘氏

地元企業ネット化、民間発想で若者のものづくりの心育てる



やまむら・ひろし　1947年東京生まれ。69年慶大商卒、富士通入社。米子会社社長、FUJITSUユニバーシティ所長などを歴任し2005年退社。日本工学教育協会副会長などを経て今年４月初当選。趣味はコーラスとチェロ演奏。坂城町出身の妻と２人暮らし。２女の父。64歳。

長野県坂城町　上田市と千曲市の間に位置し、江戸期は北国街道の宿場町、今はものづくりの町として知られる。ねずみ大根やバラが特産で、６月に開いたばら祭りの人出はのべ３万8000人。人口約１万6000人。

――「民間の発想」を強調しているが、具体的な方策は

職員には、町民約１万6000人を“お客様”と思うように言っている。行政を１つの会社と考え、全業務を民間の視点で見直す姿勢を求めていく。

町と企業との関係も同様だ。坂城町には町が中心となった企業間ネットワークづくりの組織があったが有名無実化している。民間の発想でこの部分に町が積極的に関与し、産業を活性化したい。具体的には、複数の企業が高額な機械設備を共同利用できるような仕掛け作りなどが考えられる。

――上田市と千曲市に挟まれ“地盤沈下”の懸念は

坂城町は上田市と千曲市の２つの広域行政圏に入っている。警察と消防の本部は千曲市、経済圏と総合病院は上田市といった具合だ。必要な機能さえあれば、小さな町がすべてを持つ必要はない。

ただ、この“地の利”を生かすための工夫は必要だ。たとえば巡回バス。現在は町内だけを運行しており、高齢者が病院に行くにも苦労している。これを１日数便は上田市にも乗り入れるようにする。法律上の制約はない。これまでそうした発想がなかっただけだ。

――「ものづくりの町」だが、製造業は停滞気味だ

町内に超有名企業はないが、海外売上高比率の高いキラリと光る製造業は多い。ただ、かつて300程度あった工場群も現在は200を切っており、再活性化が急務と考えている。産学官の連携組織である「信州大学ものづくり振興会」に町が特別会員として参加することを決めたのもそのためだ。

人材育成にも力を入れる。手始めに県立坂城高校で企業経営者による出前授業を始めた。今後、工場での体験学習など、ものづくりに関連した取り組みを拡充したい。

――町の活性化に向けて、にぎわいをどう取り戻すのか

坂城町はブドウ作りも盛んだが、高地の土壌はワイン用品種の栽培に適しているそうだ。米カリフォルニア州のナパ・バレーのように農工商が連携したワイン造りも検討したい。ワイナリーなど、観光客が数時間でも滞在できる場所づくりが町のにぎわいにつながる。

坂城駅の活性化も課題だ。駅舎や駅前を情報発信の場として活用するほか、懸案だったホームへのエレベーター設置についてもしなの鉄道と交渉を始めた。

就任して２カ月だが、「何でこんな発想しかしないのか」と思うことが毎日ある。よそ者を排除せず、グローカルな視点を取り入れないと活性化できない。活力にあふれ、誇れる町づくりを実現するため、「普通の発想」で町政を見直していきたい。

（聞き手は
長野支局長　**長尾　弘嗣**）

禁複製・無断転載